

課程博士学位請求論文 審査報告書ならびに審査結果

学位審査委員会： 主査 虹林 慶 本学 教授 英文学 博士（文学）
副査 吉井 誠 本学 教授 英語教育学 博士（言語教育）
副査 村尾 治彦 本学 教授 英語学 博士（文学）
副査 太田 一昭 九州大学名誉教授 英文学 博士（文学）

課程博士学位請求論文：「シェイクスピア戯曲における死の表象と民衆文化」

学位申請者： 文学研究科博士後期課程英語英米文学専攻
1566001 國崎 倫

本研究は、昨今デジタル化された資料（Early English Books Online (EEBO)など）として提供され始めた 16 - 17 世紀のブロードシート（瓦版的な読み物）や民間統計などを用いて、これまで試されていなかったシェイクスピア戯曲におけるテキスト解釈を行う、画期的な内容である。特に、民衆文化における死と疫病についての表象がシェイクスピア戯曲において、どのように巧みに織り込まれ、イメージの豊かさを醸成しているかを、十分な量と質の民間出版物を吟味、分析し、丹念な戯曲テキストの読解と分析に組み合わせることで描出することに成功している。取り扱われている戯曲も多岐に渡っており、筆者の主張する民衆文化とシェイクスピア戯曲における関連性を十分に証明する内容となっている。

論文は2部構成となっている。死や疫病についての民間の歴史的資料（木版画、ブロードシートなど）についての解説と、全般的な社会的意義についての考察が第1部「死の受容形態と民衆文化」として示され、1-3章から成る。第2部「シェイクスピア戯曲における死表象」は4-7章から成る。第1部で示された社会的背景に基づき、シェイクスピア戯曲のテキストの中に当時の民間出版物からの影響がどのような形で表れているかを、死や疫病の影を手掛かりに読み解いていくものである。以下、章ごとに詳細を示す。

第1部第1章「恒常的な闇と死亡週報考」では、エリザベス朝、ジェイムズ朝における死亡週報（"The Bill of Mortality"、特に公的機関のものではなく匿名のもの）のペスト感染死亡者について着目し、ペスト禍が市民に及ぼした影響について考察する。主要な先行研究に触れながら、それら先行研究において一次資料（民間出版物）が不十分であるため、数字に問題があること、さらに死亡週報の持つ社会的意義について十分に論じられていないこと、を挙げている。前者においては、E. K. チェインバーズによる代表的研究が再考対象となりうることを一次資料との詳細な比較、分析に基づき論じている。後者については、死亡週報が教区別の統計を示すため、危険地区を知らせる役割を担う一方で、その地区の風評被害につ

いての懸念や政治的配慮（君主の崩御など）などから、週報における記録操作が生じた可能性について論じている。総じて、第1章は死亡週報を分析することで、ペスト禍の社会的インパクトが、先行研究が示すよりも甚大であったことを示し、文学作品への影響を示唆する内容となっている。

第2章は、民間出版物における「擬人化された死」の表象を扱う。「擬人化された死」自体については、アナール学派などによる先行研究がすでに存在する。しかし、筆者は先行研究が民間出版物に触れていないことを指摘し、民衆にとっての死の受容について二つの代表例を紹介する。一つ目は、15世紀『往生術』、『エブリマン』などの代表的な宗教的人生訓であり、広い意味で宗教書として分類できるものである。だが筆者の論点は、二つ目のブロードシートや木版画などの出版物にあり、そこに民衆の本音が表されているとする。『死刑執行人と死との対話』、『収税吏と死との対話』、『死と美女との対話』、『高利貸しの死』などを例に挙げながら、これらの民間出版物は宗教的教訓を弄ぶ遊戯的な側面を持っており、民衆の敵である公的権力（収税吏、死刑執行人）や高利貸しなどへの風刺となっていることを示す。さらにこれらの作品は、いわば「擬人化された死との対話シリーズ」としての民衆文化のカテゴリーを形成しているとする。このシリーズにおいて、民衆は擬人化された死の舌を借りて、鬱憤を晴らしたのであり、それゆえに商業的にも成功したと考察する。このような民衆心理の吐露の場で、権力側と被支配者側の関係性は覆っていることを筆者は論じ、これらの死表象はシェイクスピアの戯曲に類似していることを示す。

第3章では、第2章で見た「擬人化された死」について、さらに「死の舞踏」に限定して考察を続け、シェイクスピア戯曲との関連性について考察する。ヨーロッパ大陸にその起源を持つ「死の舞踏」のイメージは、16-17世紀イングランドにおいて多くの民間出版物に現れている。特にその寓意詩に焦点を当て、擬人化された死とそれに連なり踊らされる生者の行列とのストーリーを分析している。『死の悲しい踊りと唄：新しく楽しい調べに合わせて我が笛のあとに踊れ』においては、運命や時と同様にあらがうことができない死の前に、社会階級の差がないことが示され、特に「シーツ」や「住人」などの常套句がシェイクスピア作品と関連することが述べられる。次に、『死の踊りと唄』においては、世俗的な色欲と金銭欲などにより、享楽主義あるいは刹那主義が示されるが、それは逆説的な「メメント・モリ」となっていることが分析される。『よく見よ、すべてここに描かれる』においては、農夫に着目し、土へのこだわりが世俗的死生観を表していることを分析する。すなわち、農耕具は生命を育み、墓を掘る両義的なアイコンであること、また、来世の幸福を約束するキリスト教の教義を、死への恐怖を表明することで暗に批判していること、さらには、アダムを農夫として示すことが宗教的に大胆なメッセージになっていること、などである。最後に1683年の寓意詩「死と皇帝の対話」や「死と蛆虫に喰われる国王との対話」における「死の舞踏」の常套句を確認した後、それらがシェイクスピアの『ハムレット』の5幕1場に多大な影響を与えたことを論じる。その頃はちょうど「死の舞踏」が流行した時代であり、聴衆はハムレットの墓掘人夫の場面に死神のイメージを重ねていたとしている。

第2部第4章は、まず死亡週報における幼児の割合に着目した上で、シェイクスピア戯曲において子供の夭折の持つ象徴性について考察する。筆者は子供を社会的従属者あるいはマイノリティーとして定義し、バフチンの祝祭論を援用しながら、祝祭空間における痴愚としてどのように機能しうるのかについて論じる。特にシェイクスピア戯曲の脇役である子供が創出する「コミック・リリーフ」としてのさかさま世界が分析されている。『リチャード三世』、『ジョン王』、『マクベス』における子供が大人社会の歪んだ姿を映す役割を果たしており、束の間ではあるが、その権力を無効化する祝祭空間を生み出していることを論じ、さらにその空間の持つ社会是正のポテンシャルが子供の夭折によって打ち砕かれ、戯曲の悲劇性が高められていることを指摘する。さらに、子供の夭折に対する社会の関心を確認するため、ジョン・ウェブスターの『白い悪魔』とジョン・マーストンの『アントニオの復讐』における子供の役割についても、同様の分析を行い、いかに子供を祝祭空間の痴愚として用いることが劇作において広く行われていたかを示す。劇作に頻繁に登場する道化と異なり、痴愚としての子供の風刺は無意識であるがゆえに、一層その賢明さが引き立っていること、さらに子供は社会の持つ矛盾を炙り出す鏡として機能していることなどを考察し、社会への不満と相まって、子供の夭折の悲劇性は広く民衆に共有される、と結んでいる。

第5章は『ハムレット』を「死の舞踏」の一種であるモグラ表象から読み解く試みである。まず、15世紀にフランドル地方で発行された“Vander Mollenfeeste”という詩について解説し、その中でモグラが地下世界の王であり、擬人化された死神であることを述べ、さらにはオランダ語の辞書やフランス語文化圏の資料を渉猟して、モグラの盲目性が死の無差別性と結びつけられており、モグラが死神を表象するものであることを確認する。次にモグラと『ハムレット』の関連性について、特に盲目性について分析を行い、モグラが真偽を見抜く心眼を示すモチーフとなっていると論じる。そして、脇役たちに対して騙し合いをするハムレットを、テキスト分析によりモグラ、さらには鉱山夫などのイメージに重ねる。さらに筆者は『ハムレット』におけるモグラ表象を、垂直方向の世界観、すなわち地上世界と地下世界の対比において論じる。例えばそれは、宴と葬儀との対比であり、生きるための食糧と腐敗、循環する死骸との対比である。筆者はバフチンを援用しながら、モグラの祝祭的な役割について、生と死の二律背反的なグロテスクとして示す。

第6章は、『ジョン王』における王権争いがフランスを巻き込み、特に女性間の争いにおいて行われる際に、ペスト禍に関する言葉が多用されることに着目し、その言説がいかにナショナリズムを扇動するように仕組まれているかについて論じている。まず筆者は、ペスト禍において「内と外」を区別する意識が強く民衆に広がっていたことを、ロンドンと田舎の対立などを描いた民間出版物の一次資料や死亡週報などを用いて示す。次にこの国内の「内と外」との対立を、イングランドと近隣諸国との間との対立に当てはめて考察する。ペストは常に外国からもたらされたという意識が、近隣のカトリック国への嫌悪感と結びつけられていることを、公式文書などをもとに論じた後、筆者は危機的状況下で表面化する排他主義がナショナリズムと結びつくことを示す。『ジョン王』では、フランスとの関係が深いエ

レノアが疫病に感染した血を海外より持ち込み、その血を受け継ぐジョンを戴冠させ、国を衰退させる悪として聴衆に提示されていることを指摘する。つまり、民衆のペスト禍への不満は、舞台上のジョンやエレノアへの不満と重なりうることを示す。さらに筆者は、内なる敵としてのペストの民間インチキ治療について論じ、それに頼らざるを得ないコンスタンスのやり場のなさがペスト禍における民衆の心情であったことも付け加える。

第7章は、民間出版物を調査し、神罰としてのペスト禍を喧伝する宗教人たちに対して民衆が募らせていた不満が無神論的な主張となって表れていたことを確認した上で、ジョン・フレッチャーとフランシス・ボーモントの共作、『フィラスター』における神の名の濫用あるいは冒流的な表現について、疫病と宗教と演劇の関連性から論じる。『フィラスター』が多くの版を重ねたことに着目し、Q1（第1四折本）からQ4までテキスト異同について分析し、特にQ3において見られた神への言及がQ4では別の言葉に置き換えられていることを指摘する。その歴史的背景として、冒流的な言葉の使用を禁じた法令に触れた上で、言葉巧みにその行為自体は劇中のセリフから排除されなかったことを論じ、それが民衆の宗教的権威に対する不満感情を反映させたものであったと分析する。先行研究においてあまり顧みられることのなかったQ4について、民衆心理との関係を考察することによって、ペスト禍の影をテキスト中に見出している。

（評価）

本研究は大きく二つの点において画期的なものと言える。まず、これまで日本ではあまり研究が進んでいない16-17世紀の民間出版物に光を当て、丹念に調査し、当時の民衆文化、民衆心理についての考察をまとめた点である。この仕事は、今後のさまざまな研究に繋がる、大きな可能性を持ったものであり、その嚆矢として特筆に値する。次に、このような民間出版物の分析を通して得られた知見を、シェイクスピアや同時代の劇作家の作品読解に応用した点である。シェイクスピア研究史は膨大なものであり、新たな読み方を提案することはたやすいことではない。しかし、本研究は新たな資料と読み合わせることで、民衆文化に寄り添うシェイクスピアの姿を描き出すことに成功していると言える。今後のシェイクスピア研究においても、大きな期待ができる内容である。

本研究のテーマは「死」であり、特にその原因の一つであるペスト禍の表象についてである。「シェイクスピアが舞台上でペストを再現しなかった理由を、歴史的資料と共に追及する。」

(19) とあるように、筆者の関心は歴史的事実と文学的表現との関連性にある。これまでのシェイクスピア研究は、文学テキストと歴史的資料との関係に注意を払いつつも、市井の人々の生活の実態との関連までには十分に手が回っていなかった部分がある。筆者は民衆における「死」への意識をより普遍的なものとして捉え、文学作品中の「死」の意識の再解釈に挑んでいる。その最たるものがペストを巡る言説である。筆者は政治的あるいは経済的理由で劇作中から排除されてきたペストの惨状についての描写が、実は暗に示されている

ことを、テキストの端々に見え隠れするイメージや何気ない言葉と民間出版物のそれらとを比較対照しながら説得力を持って論じている。最終的には、筆者が「ペストという時事問題をあくまで間接的な表現にとどめ、苦境における感情を民衆と共有し共感することにより、安定的に劇場を経営することができたと考えられるのである」(154)と述べるように、シェイクスピアによるペストの間接的表現が、民衆心理をつかむという点で、劇作を社会的により重要なものに行っているということを論証している。

第1部は民間出版物についての詳細な調査と分析が示される。まず死亡週報を当時の民衆の死を描写する客観的データとして示し、それを基に分析したペスト禍の内容がこれまで先行研究で示された以上のインパクトを持つものであることを指摘している。さらに、死亡週報それ自体が、政治的、経済的関係性において作り上げられる資料であることも新たに付け加えている。次に、「擬人化された死」が示される寓意詩や木版画を調査、分析することで、死に直面した民衆心理を分析し、それが宗教的指南書とは異なる風刺的な内容であることを確認した上で、そこに逆境にもめげない民衆の反骨精神を見出している。最後に、「擬人化された死」の中でも特に「死の舞踏」に絞った議論を行い、イングランドにも流布した資料の中にシェイクスピア戯曲におけるセリフとの関連性を指摘している。これらの議論は、16-17世紀のイギリス戯曲が書かれる社会的背景となっており、戯曲が民衆に開かれた娯楽であったことを考え合わせると、戯曲の分析を行うにあたって有効なものであることを証明している。このように、これまであまり扱われてこなかった民間出版物についての詳細な分析は、いわば本研究のテキスト分析の土台として機能していると言える。

第2部は「第1部で確認した疫病と死に関する民衆文化や当時の共通認識が、シェイクスピア戯曲に反映されていることを論じる」(17)ものである。総じて民衆の死の受容について、劇作家がどのような配慮を行ってテキストを紡ぎ、舞台設定を行っているかを論じていると言える。すなわち、死亡週報でも数的に目立っている幼児の死について、「死の舞踏」の変奏であるモグラ表象について、ペスト禍における外国排斥主義について、同じくペスト禍において強まる宗教的引き締めについて、民衆がどのような心情であるかを劇作家が正しく理解し、それに配慮した上で、民衆を劇場に惹きつけるための文学上の策を講じたとするものである。前述の通り、演劇は民衆の娯楽でもあったため、政治的権力に対しての配慮同様、民衆心理への配慮は、興味深い研究の対象となりうる。その領域に1部で確認した新しい資料を使うことで多角的に踏み込んでいるのが第2部と言えるだろう。

4章は脇役であるこどもに、5章はモグラのイメージに焦点を当て、それぞれが創出する「さかさま世界」が劇作全体に二重写しになるさまを描いている。バフチンの理論などを用いながら、それぞれが民衆に想起させる死のイメージ(死亡週報や「死の舞踏」)について説得力を持って論じており、シェイクスピア戯曲の新たな見方を提示することに成功している。特に5章において盲目性を鍵に『ハムレット』を読み直し、そこに死と再生のテーマを新たな文脈でとらえなおす試みは、民間出版物が効果的に援用された例と言える。さらに6章では『ジョン王』を論じ、外国排斥主義とナショナリズムだけでなく、ペスト禍でイン

チキ商売を行う者たちを内なる敵としてテキスト中に認めることで、シェイクスピアが単に民衆の心情に寄り添うだけでなく、民衆の外国排斥主義の持つ盲点を暴くような、間接的なメッセージを発していることを示唆しており、劇作家と民衆とのインタラクションの複雑さを描写することに成功している。7章はこれらの議論に制度的な経緯を付け加えることで補完的に機能していると言えるだろう。

本研究は以上の通り、画期的な側面を持つものであるが、課題もいくつか有している。まずは、民間出版物の吟味の問題である。資料の量的な問題もあるかもしれないが、時代、場所、出版者の精査を行った上で議論すれば、より説得力が増すと考えられる。特に文学テキストとの関連で資料が用いられる場合は、今後の発展的研究のためには重要なことと思われる。次に、戯曲テキストの分析についてであるが、量的に少な目である傾向と、局所的に扱う傾向がある。より多くのテキストについて、より広い視野を持ちながら分析することができれば、民間出版物がより活かされた形での議論が可能となることであろう。しかしながら、これらの点はあくまで理想的な論文を想定して提示するものであり、今回の研究が新たな領域に踏み込んだもの考えると、その評価は変わらない。

結論として、学位審査委員会は、審査対象となる論文が、

- 1) 新たな資料を駆使しつつ、シェイクスピアを中心とした16-17世紀戯曲の新たな読みを提示している点において、独自性、新見性のある研究であること
- 2) 先行研究や一次資料に当たり、それらを詳細に分析し、論理的に論じており、説得力のある学術研究として評価できること
- 3) 本論文の一部は学会での口頭発表や論文の公刊によって学界においてすでに評価されたものであること、また、全体として体系的な研究として高い評価に値するものであること

の点から、「大学院文学研究科博士後期課程・ディプロマポリシー」に合致するものであり、「文学研究科英語英米文学専攻博士後期課程学位申請論文における審査および学位授与の決定にかかる基準について」の審査基準を満たしており、博士（文学）の学位授与が適当であると判断する。